

第39回びわこ学園実践研究発表会報告

令和元年12月14日(土)立命館大学・くさつキャンパス(滋賀県草津市) 法人事務局人財育成部

第39回びわこ学園実践研究発表会は、「命と暮らしに寄り添う支援～どこで暮らしても安心して生活できる支援の仕組み創りにむけて～」をテーマに開催しました。当日は205名の方にご参加いただき、午前中はシンポジウム、午後からは3つの分科会において協議、検討をいただきました。

シンポジウム:「どこで暮らしても安心して生活できる支援の仕組み創りにむけて」

【コーディネーター】田村和宏氏(立命館大学 産業社会学部教授)

【シンポジスト】

宮田広善氏(重度障害総合支援センタールルド センター長)

「地域支援と入所支援・暮らしを支える支援の形」

南方孝弘(びわこ学園障害者支援センター 所長)

「中期計画の目指すもの その具体的展開」

口分田政夫(びわこ学園医療福祉センター草津 施設長)

「地域を支える入所機能」



宮田先生の話題提供では、入所支援、地域支援にいずれにおいても「生命を守る」支援のみでなく「生命を彩る」支援が大切であること、それを提供するには異なる専門職種が境界線を引かず「境界線がにじむ」ようなチームワークが求められており、それこそが専門性であるとお話しが印象深いものでした。

南方所長からは、今年度からスタートするびわこ学園の第3期中期計画について、入所施設を核として多様な地域支援の事業展開を計画していること、加えてびわこ学園単独の事業展開ではなく、地域の支援機能のネットワーク形成、具体的には医療機関、生活介護事業所、相談機関、そしてグループホーム等関係機関が横連携できるよう、

びわこ学園が繋ぐ役割を果たすことで県内の重症児者の安心できる暮らしを支えるという方向性が紹介されました。

口分田施設長からは、長期入所も地域生活のひとつのあり方であるとした上で、現在実施されている医療型短期、有目的有期限入所、NICU後方支援、医療入院など、病院機能を活用した多様な柔軟な地域支援について紹介がありました。

これらを受けて、コーディネーターの田村氏からは、制度的課題として入所施設の暮らしの質をあげることができる体制保障、入所者のケアマネジメントとくに児から成人への移行期の節目の支援、また就学前の重症児への日中活動の保障、医療重度の子どもを受け皿の体制整備、社会的養護家族の再構築の支援等の必要性が語られました。

第1分科会:「活動を楽しむ」

報告の前にびわこ学園の石井心理判定員から『重い障害のある人たちの日中活動支援』と題し、様々な活動の基本的な考えについて説明がありました。報告は①センター草津から「医療的ケアの必要な利用者の日中生活支





援を考える」、②センターから「強度行動障害を有する利用者のリズム活動における主体性を活かした支援を考える」の2題でした。2つの事例は利用者の障害特性は大きく異なりますが、共通するのは活動で発見できた力や引き出された力を活動の中だけでの完結とせず、利用者の力を継続的な視点で捉え日々の生活支援の中にも取り入れていくことです。助言者の田村氏からも「活動だけで終わらせず生活という横の方向へ広げていくことが生活を営む力となる」という助言がありました。障害

特性が異なっても一人ひとりの興味関心の世界に寄り添い多職種が連携して、暮らしの柱として活動を支援するというびわこ学園の要を再確認する分科会となりました。

第2分科会：「意思決定支援」

報告は、①知的障害児者地域生活支援センターから「長期にひきこもり、高齢両親と暮らすAさんの過去と現在から見えてくる支援」②びわこ学園障害者支援センターたいようから「サウンズ&シンボルズ(以下シンボル)を用いたAさんのコミュニケーションについて」③同センターえがおから「チューブ自己抜去から考える本人の意思決定支援について」と共同実践のNPO法人CILだんない頼尊恒信氏による「ピアカウンセリング」の説明と3題報告されました。

①は、過去にひきこもり状態であったAさんのタイミングを尊重した支援により、通所中に自主的行動を引き出した実践報告、②は、脳性まひのAさんが、コミュニケーションツールであるシンボルを使用し、思いを伝えられるようシンボル辞書や健康用シンボル作成に取り組んだ報告、③は、盲聴障害があるAさんがチューブ抜去する理由の仮説をたて検証、抑制せずに経過している報告でした。助言者の滋賀県障害福祉課大平眞太郎氏より、意思決定支援には「個別的視点、共有、評価が重要」との助言を戴きました。



第3分科会：「医療的ケアが必要な小児への支援」

報告は、①法人の重症心身障害児者ケアマネジメント担当者から「滋賀県における医療的ケア児等の実態と支援の現状」、②センター草津から「体動がある医療的ケアを必要とする重症児の安全への取り組み」、③訪問看護ちよこれと・多機能型事業所ちよこらんどから「24時間人工呼吸器が必要な医療的ケア児が地域の小学校に楽しく通えるように」を報告しました。①は、医療的ケア児等の増加に伴う多様化する支援について滋賀県、びわこ学園での実態や課題と施設、地域双方の役割等について報告、②は、学齢期の動く重症児の人工呼吸器管理等の安全の工夫と、元気に登校できるよう多職種で取り組んだ事例、③は、信頼する看護師を中心とした多職種チームで連携を重ね小学校就学に向け効果的にアプローチを行った事例を報告しました。助言者村井氏からは、医療的ケア児等を支える人材、環境の整備が十分でない現状を認識し、今回の事例のように多職種で医療的な安全・健康を守りつつ、当たり前の成長を促すことが大切だとの助言をいただきました。

